

私に影響を与えた1冊

takuya-cd

私に影響を与えた1冊としての『破戒』

タイトルになっている「破戒」、最近の言葉で言うなら「出オチ」だ。探偵小説でいえば、どのような手法による犯行かは分からずとも、犯人が最初から分かっているようなものである。この状態である以上、著者はテーマや展開などで読者を引き込まないといけない、とても辛い境遇に立たされている。

例えば、現代であれば、著者の若さ、容姿の端麗によって、本の中身とは違った形の情報から、読者を獲得することもできるだろう。数年前の二名の若手女性作家が、ピアスをした現役京大生が、小説の評価云々ということではないかたちではなく、芥川賞受賞作家というかたちで私の前に小説家として現れた。そして、今回私が取り上げる『破戒』の著者島崎藤村の容姿はなかなかイケメンである、試しに「島崎藤村」でググって欲しい。出オチだろうが、小説の中身が大したことがなくても、ファッション誌でちょこっと対談記事や写真が載るだけで、メミーハーな女子は喰いつくかもしれないと思わせる顔ではないか。

そのようなわけで、自然主義の嚆矢であり、甘いマスクの眼鏡男子の小説をみんなも読もう、と言いたいわけではない。もちろん、顔の容姿が、話題性が本を読む契機になるのなら、私はそれを全面に押し出していくべきである、それによって小説の内容と価値は上下しないからだ。

さて、本題である。なぜこの本が、どのようなかたちで私に影響を与えたかということをお話さねばなるまい、タイトルにもそう書いてあるのだから当然だが。

おそらく、話の大筋を書いても、この本を読もうと思う人の意欲を殺ぐようなことはあるまい。最初に言ったことではあるが、この小説は「出オチ」である。主人公である丑松という部落出身の青年教師が、父親との戒めを破り、自分は部落出身だということを告白し、アメリカへ旅立つということがおおまかな内容だ。他にも破戒をおかす人物はいるのだが、まあ、ググるなり、小説を読むなりして欲しい。

この小説の最も重要な点は、日本は単一民族国家と素朴に思われがちであるが、実際のところ、被差別問題をはじめとして、日本には依然として民族差別は残っており、そういったところに対して読者の目を向けさせるところでは、断じてない。それだったらきっとここまで長くこの小説が読まれるということはなかっただろう。

この小説の凄いところであり、私の心が揺り動かされたところは、この小説の中に静かに、だが、確かに漂う社会、あるいは世間の「空気」であり「場」であり「関係」であり、それが丑松を、私を、読者を悩ませることがあるというところだ。そもそも丑松自身、なぜ部落出身であることをコンプレックスにしているかと言えば、部落出身であることによって周囲――みんな、と言い換えてもいいかもしれない――が変わってしまうことを恐れているからなのだ。ものいえばくちびる寒しということわざがあるが、まさにそれを恐れている。この問題は、部落という差別問題に限ったことではなく、もっと身近な問題ではないだろうか。自分の趣味や性癖は軽々しく口に出すものではないにしても、それを人とは違うからといって重く受け止めたり、罪悪感を感じるのは考え過ぎではないだろうか。最近では、オタクといわれる人々が自分のオタク趣味を表に出すようになってきてはいるが、どこかヤケクソ、厚顔無恥、排他的――ツイッター的にい

えば、私の趣味趣向に理解がない人はフォローしないでくださいといったあたりか――なところを感じるのが私の正直な印象だ。自分の趣味を掲げることと引き換えに、身構えていては疲れるだけではないか。親しくなったうえで、相手が理解を示してくれないのであれば、その話はそこで終わりというだけの話であって、そこで関係まで途絶えてしまうのはなんとも悲しい。全てを受け止めてくれるような、母性的な、あるいは、神的な存在を相手にも自分にも求めるなんてバカバカしいではないか。そのようなことを求めなくては、我々は人との関係を築くことができないとでもいうのだろうか。

『破戒』の主人公丑松は、アメリカへ旅立つ。それは彼が生きていたころの日本において、被差別という情報を開示した人間が生きる場がなかったからだ。それだけ日本においては世間が強かったのである、人をひとり消すことができるほどに。自分の権利を守るという名目で闘争するという選択肢もあっただろうが、著者はそれを選ばなかった。このような苦悩と結末は、なかなか日本的ではないか。ヨーロッパなら、間違いなく徹底抗戦だ。

この小説の人々が抱えているような苦しみ、辛さを感じている人は少なくないと私は思う。この小説を通じて少しでも心が和らぎ、救われるような人はいるであろうし、私はそうした読者の一人である。この私の言葉が、『破戒』を読む機会になったならば望外の喜びである。